

医学史 No.5

精神医学史とフーコー

—— 狂気はどう定義されてきたか

目標：精神医学の歴史をミシェル・フーコーの「狂気の歴史」（1961年）を軸に読み解き、狂気の定義は時代・社会によって変わるという認識を得る。現代の精神医学における正常/異常の境界・診断の政治性・当事者の権利を論じられるようにする。

衝撃体験：歴史の転換点

導入：同性愛は1973年まで精神疾患の診断基準（DSM）に載っていた。これは何を意味するか？精神疾患の定義は医学的事実ではなく、社会的・政治的・文化的構築物である可能性がある。

歴史の構造：中世（悪魔憑き）→ 近代（ピネルによる鎖の解放 1793）→ 20世紀（フロイト・薬物療法・脱施設化）→ 現代（DSM-5・当事者運動）

清光学院 AP SEIKO / スプリント医学史 No.5

採点者の視点 —— 合格答案と不合格答案の分岐点

採点者の視点

採点者の視点

採点者はここを見ている —— 精神医学史・フーコー・近代医療で合格答案はこういう「構造」をしている

① なぜ同じ答えでも評価が違うのか

清光学院の講師陣は、これまでに皆さんと同じ志を持った先輩受験生たちの答案を何千枚も採点し、合格・不合格の判定を下してきました。その経験から言えることが一つあります。

「正しい答えを出していても、なぜそう考えたのかが見えない答案は、採点者の印象に残らない。」

精神医学史・フーコー・近代医療では、**権力と医療の関係の根拠**が答案の質を大きく左右します。

② 精神医学史・フーコー・近代医療で採点者が見ているポイント

「フーコーの「狂気の歴史」から精神医療の権力性を論じた答案」が採点者評価を上げる

💡 この授業の使い方

各問題のワンポイントには「採点者がどこを評価するか」の視点が含まれています。答えを出すだけでなく、根拠を一文添える習慣を意識しながら取り組んでください。

③ 総合型選抜・口頭試問でも同じ構造が問われる

採点者（大学教員）が口頭試問で確認したいのは「答えが出るか」ではなく「思考の構造を説明できるか」です。この授業で習得する「上から俯瞰する」視点は、あらゆる試験形式に通用します。

核心1：フーコー「狂気の歴史」の核心

フーコー「狂気の歴史」の核心：フーコーは狂気は発見されたのではなく近代社会によって作られたと主張。理性を持つ社会が理性を欠く者を排除するために精神科病院を作ったという権力論的分析。

核心2：DSMの政治性：診断基準はいかに作られるか

DSMの政治性：診断基準はいかに作られるか：DSMは専門家委員会の投票で疾患を追加・削除する。同性愛削除（1973）・PTSD追加（1980）が示す社会的影響——科学的事実というより専門家集団の合意。

核心3：当事者運動とMad Pride

当事者運動とMad Pride：精神疾患の当事者が障害ではなく違いとして自己のアイデンティティを再定義する運動。医学モデル（疾患・治療）vs 社会モデル（差別・包摂）の対立。

 **続きは講義でご覧いただけます**

この教材には、採点者の視点・核心的な解法・入試問題・演習・まとめがさらに収録されています。

大学教授陣が設計した「普通の授業では出会えない接続点」を体験できる完全版は講義でご提供いたします。